

# 学生グループプロジェクト・ファイル

## Student Group Project File

公募提案型研究助成制度により、学生たちがプロジェクトチームを結成して研究活動を行う「学生グループ・プロジェクト」。あるグループは研究室の中で、またあるグループは研究室を飛び出して活動を行っています。研究室の中と外、異なる舞台でそれぞれの研究に打ち込む2つのグループを紹介します。

### FILE 03 「先住民族の知識継承」プロジェクト

昨年6月、国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択され、大きく報道がなされました。しかし、等身大で、文化的な知識継承を行っている方々の地道な取り組みはあまり知られていません。このグループの大きな目的の一つは、日本とニュージーランドの先住民族の置かれてきた歴史と、伝統的知識の今日的な継承の取り組みを学ぶこと。それは、メンバー自身の現在を省みることにもつながりました。

#### MEMBERS

文化人類学的手法でさまざまな組織・コミュニティの「知」を研究する伊藤研究室を中心としたグループ。後列左から、代表者の水岡隆子さん、栗本崇史さん、道合裕基(どあいひろのり)さん(道合さんは金沢大学の文化人類学研究室の修士学生)。前列左から、濱寿恵(はまさとえ)さん、郷仁(なりん)さん、大戸朋子さん。



#### ■多角的な視点での「学び」

このプロジェクトの特徴は、日本とニュージーランドの先住民族の歴史と知識継承の現状を、ニュージーランドの先住民族マオリ出身の研究者らと共に、比較の視野をもって研究することです。メンバーには内モンゴルからの留学生もいれば、社会人経験が長い学生もいます。多様な文化背景をもつメンバーがそれぞれの視点で調査を行います。

メンバーたちは現場訪問(フィールドワーク)へ赴く前に、2ヶ月にわたって勉強会を重ねました。観光・教育・メディアなどの研究テーマを各自が設定し、文献やDVDを通してアイヌ・マオリの現状

#### ■文化的な知識継承の現場へ

飛行機、電車、バスを乗り継ぎ、8時間半かけてようやく目的地に到着。翌日、地元の行政関係者や住民、観光客ら約50名とともに「チブサンケ祭」に参加しました。チブサンケとは、アイヌ民族に伝わる丸木舟(チブ)の進水の儀式。進水式を中心に、古式舞踊・アイヌ式結婚式など次々に行われるイベントにメンバーは釘付けになりました。

現代に再現されるこれらの儀式は、和気あいあいとしつつも、厳粛なもの。儀式的祈りのアイヌ語は、カタカナで書いたものを読み上げます。普段、日本語で和(日本人)と同じ生活をしている今日のアイヌの方々にとって、アイヌ語は「外国語」同然。結婚式などの儀式も、途中途中で中断され、一つ一つの所作について、地域の人々や道内外から集まった観光客、学生らに向かって「解説」がなされます。こうした事態を「すでに言葉や文化をなくしてしまっている」



進水式で使われる伝統的な丸木舟(チブ)

などと否定的・一面的に捉えるべきではなく、和(日本人)による「侵略」と「同化政策」の歴史の帰結であることを忘れてはならないと、メンバーたちは事前学習で学んでいます。アイヌ風の料理や舞踊を楽しみながらも、その姿をしっかり目

についての背景知識を蓄積。8月末、北海道日高の平取町二風谷(びらとりちょうにぶたに)へと出発しました。



平取町二風谷のまち



儀式は伝統的な家屋(チセ)の中でも行われる



儀式用の冠にアイヌの着物を身につけ折り(カムイノミ)を捧げる

#### ■ニュージーランドの研究者らが合流

チブサンケの日の夜、マオリの歴史・文化の研究者であるウィーリー博士とマオリ語の教育者であるンガフィアさんがニュージーランドから駆けつけ、合流しました。

翌日、一行は木彫りの体験学習を行った後、アイヌ資料館やアイヌ文化博物館を見学。ここで多民族から成るグループならではの発見がありました。資料館でアイヌの古代織を見学していると、ンガフィアさんのあごに入ったモコ(入れ墨)を見て、実演者が自身の祖母も同じように入れ墨をしていたことを話したのです。アイヌの女性もかつては伝統的に口元に入れ墨をしていたこと、明治政府から「野蛮な風習」として禁止されたことなど、学生メンバーだけではおそらく聞くことはなかったであろう貴重なお話を伺うことができました。

午後からは、アイヌの知識伝承を行っている貝沢真紀さんからのレクチャー。和(日本人)によってアイヌ語を取り上げられた歴史や、さまざまな誤解に基づくことが多い日本人のアイヌ観について、事例からお話いただきました。貝沢さんは、学ぼうという子どもが少ないアイヌ語教室の現状、子どもだけでなく親もアイヌ語を学ぶ必要があるということを紹介。それを受けて、ンガフィアさんがマオリの幼稚園における言語教育を紹介しました。日本とニュージーランドとの政策や現状の違いを超えて2つの先住民族が抱える共通の課題について、比較の視野から考えることができました。

翌朝、ウィーリー博士、ンガフィアさんを含む一行は二風谷を後にし、再びバスや飛行機を乗り継いで、この後行われるセミナーのため本学へと戻りました。



ウポボ(座り歌)など、実演も含めた貝沢さんの講義に熱心に聞き入る



アイヌの伝統衣装の前に立つンガフィアさん。あごには民族的アイデンティティを表す伝統的モコ(入れ墨)

#### ■共有体験からの新たな気づき

翌日、ウィーリー博士、ンガフィアさんによるセミナーが行われ、メンバーはマオリの歴史とマオリ語教育の取り組み、マオリ文化の世界観とその伝承・創造について学びました。二風谷での体験を共有しているために、比較の視点から、より理解を深めることができました。

レクチャーは座学にとどまりません。ニュージーランドのラグビーチームでお馴染みの、マオリの伝統的な踊りと歌「ハカ」が披露され、メンバーも体を動かしてマスターしました。

お二人の帰国後も、調査活動を記録したフィールドノートを持ち寄っての討議を続けました。異なる視点からの意見を持ち寄ることで、それぞれが新たな発見や課題を得ています。例えばメンバーの一人は、アイヌやマオリが自民族の歴史・文化を継承しようとする姿を目の当たりにして、「自分にはそのようなアイデンティティがない、空っぽだ」と愕然としたことを報告。このことばは、メンバー全員に「自分は何者か」という根源的な問いを突きつけることになりました。

メンバーたちの勉強会や意見交換は、現在も継続中です。各自が得たい気づきを共有することで、さらなる気づきに達する。グループワークが持つその魅力を、このプロジェクトは体現し続けています。



ウィーリー博士による「ハカ」のレクチャー。2時間近くにも及ぶ熱の入りよう

#### Message from Dr. Wiri

##### ウィーリー博士からのメッセージ

皆さんが先住民族の諸問題について深く考えていることに感銘を受けました。このリサーチプロジェクトはたいへん価値のあるものです。先住民族の言語や文化の継承に関する研究、ひいては人々とコミュニティに貢献できるような研究を、今後も粘り強く続けてください。短い滞在でしたが、皆さんと濃密な議論ができたことをうれしく思っています。

ニュージーランドへ帰国したウィーリー博士から、グループメンバーにビデオメッセージが届きました!

ラパタ・ウィーリー博士  
Dr. Rapata Wiri  
ニュージーランド国立ワイカト大学



#### 指導教員の声

このグループには、新卒の学生のみならず、社会人経験をもつ学生や留学生もいます。理解や経験の度合いが異なるなかでグループワークを行うことには難しさもありますが、一人ひとり違うからこそ学び合えることも多々あります。さらに、背景の異なるニュージーランドからお二人とのコミュニケーションによって、先住民族の知識継承の取り組みを学ぶのみならず、日本に住む現在の自分たち自身を省みることにつながりました。多くの気づきを得たメンバーたちを見て、グループワークの重要性を再確認しましたね。

伊藤 泰信  
准教授  
Yasunobu Ito

